

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

# 戦史館だより

2022年6月10日発行  
戦史館事務局〒029-4427  
岩手県奥州市衣川陣場下  
41番地 戦史館 オフィス 花岡  
編集発行人 花岡千賀子

会長理事 岩淵 宣輝 専務理事 小原 守夫 ☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

## 平和は 武力では 守れない 「災害は忘れた頃にやってくる」

と昔から言われているのは、天災のことだと思っていましたが“天災”は時と場所を少しだけ変えて、忘れることなく頻繁に襲ってくるようになりました。今や忘れた頃にやってくるのは戦争という“人災”。日本の終戦から77年経過する今、平和ボケと言われる頃にやってきて世界中を巻き込んでいます。77年間、日本国内で戦争がなくても、中東はじめアジア、アフリカで紛争が絶えたことはなく、沖縄から米軍機が発進しても、どこか人ごとのような感覚で、その報道もわずかでした。

この3ヵ月、ウクライナでの悲惨な映像が目には飛び込んで来ない日はありません。戦場がヨーロッパで、侵攻したのが国連常任理事国のロシアなのですから、目や耳を疑いたくなります。ウクライナの人々が発信する生々しい映像は、ロシア軍の非道…殺しと壊し…ここまで人間は残酷になれるのか、これが戦争なのかと、まるで地球が逆回転して百年前に戻ったような侵略戦争が、21世紀の今 起きているのですから。

国際社会は当然のようにロシアによるウクライナ侵攻を非難し、経済制裁、難民支援も広がっていますが、NATOによる最新兵器や通信技術がウクライナへどんどん供与されることで、戦争の長期化、戦場も犠牲者も拡大するばかりです。

他国に攻め入るときの理由に大儀名分はありません。米軍がトンキン湾事件をでっちあげてベトナム戦争に突入したように、旧日本軍（関東軍）が満鉄を爆破し、満州事変の発端を作って中国に侵略したように、今回のロシアによるウクライナ侵攻も同じ事を繰り返しているようです。

インド独立の父、マハトマ・ガンジーは糸車を回しながら「非暴力は人間に与えられた最大の武器であり、人間が発明した最強の武器よりも強い力を持つ」と“非暴力不服従”運動の先頭に立って人々に訴えました。今ガンジーの言葉を改めて読み返すと、本当にその通りなのですが、いったん戦争が始まってしまったら、どうすればいいのでしょうか？もう誰にも止められない。侵略されたら自分の家族や財産を守ろうと立ち上がるでしょうし、敵を国境線まで押し戻そうと行動するでしょう。

ウクライナを応援する側の気持ちもエスカレートして、ロシアの艦船が撃沈されたという報道に、拍手したり歓声を上げたり、まるでスポーツを観戦してスッキリ感を味わうような…。でも冷静になって考えるとどうでしょう？ 沈没した旗艦「モスクワ」、その巨大な艦内には、多数の兵士や乗組員がいたはずですし、NATO・米国提供の最新鋭の武器で破壊されたロシアの戦車には戦争とは知らずに、だまされて“特別軍事作戦”に送り出された若い兵士たちが乗っていたはず。そしてロシア側が発表したニュースを聞くときは、どうせウソとプロパガンダばかりだろうと判断してしまいます。かつての大日本帝国の『大本営発表』と全く同じですからね。



ロシア兵の戦死者の数は発表されないのでもわかりませんが、上官の命令は絶対なのでしょう。かつて終戦間近の日本陸軍でも、上官が「カラスの色は白だ」と言えば「いいえ黒です」と決して言わせないための洗脳がなされたと体験者から聞きました。ロシア国内の人々は大統領の言葉を信じているのでしょうか？ 怖くて戦争反対を口にできないのでしょうか？ 海外に暮らすロシア人は息をひそめて耐えているのでしょうか？ 敵性外国人として米国に暮らす日系アメリカ人が収容所に入れられた時代があったように、差別されて不当な扱いを受けてはいないのでしょうか？ もしかして、それぞれ都合の悪いことは報道されないまま、世界中で「それ行けドンドン」と一つの道しか見えないような状況に追い込まれているとしたら？それは怖いことです。敵の兵士をたくさん殺し、最大限にモノを壊せば、勝利になるのが戦争なので自衛のための戦争でも、殺しと壊しをしなければならないのです。

ロシアのプーチン大統領は柔道黒帯、国際的には八段の有段者だとか。来日した際、北方領土問題を柔道に例えて日本語で「引き分け」と口にしていました。柔道を究めた方らしいので、日本語ペラペラの駐日ロシア大使を通じ、この戦争を“引き分け＝早期停戦”になるよう働きかけてほしいと祈ります。日本は77年前、あれだけの犠牲を払って二度と戦争をしないと誓ったのですから、日本らしい、あらゆる外交努力を途切れることなく進めてほしい。米国の大統領に、防衛費を2倍にする約束（米国製の決して安くはない武器を、相手の言い値で、2倍買う？）をする前に、日本にしかできないことを。

日本にできる外交の最低ライン、それは“お隣さん”とトラブルを起こさないようにすることではないでしょうか。人間どうしの近所づきあいに例えると、隣人との関係は結構ムズカシイ。全方位の親密なお付き合いはできなくても、日常の挨拶を欠かさず続けることで、誤解やトラブルを回避できますから。ロシアも、中国も、韓国も、北朝鮮も、隣の国なのに、今の日本が“お隣さん”とまともなお付き合いができていないのは残念なことですよ。国どうしは、互いに引っ越しできないのだから、まず挨拶して相手の話に耳を傾けることから再スタートしましょう。

戦史館だより 119号に掲載した『環日本海・アジア諸国図』を思い起こしてください。（戦史館Web. pdfで閲覧可能）通称『逆さ地図』は日本海側の都市と近隣諸国の交流を深めようと、富山県が制作した地図で、朝鮮半島、台湾、中国から日本を眺めると、中心に位置する日本海は巨大な湖のようで、能登半島のあたりが日本の玄関口に見え、日本は海で世界とつながっていることが肌感覚で理解できます。

## 久々の平和学習 子供たちの質問に沿って

2年以上のコロナ禍の影響で、団体の戦史館見学は皆無でしたが、3月に入って宮城県から学童クラブの子供たちが、先生方に引率されて見学に来てくれました。

子供たちに何を伝えようか…。久しぶりの子供たちの来館に緊張しました。





ちょうど子供たちからウクライナについての質問も出されたことから「わずか80年前の日本も、今のロシアと同じように戦争をしていたんだよ…」と話し始めました。子供たちにとって、テレビの映像で、戦争がどんなに恐ろしいものか肌で感じているようでしたがかつての日本と対比することは、ちょっと難しかったようです。

戦史館の展示室で、子供たちに話すときはいつも、父、岩渕慶次の出征時の記念写真を見てもらっています。出征する父を中央に親族や仕事関係…警視庁北品川署の仲間が警察の官舎に集まり“武運長久”を祈る壮行会で2歳の岩渕宣輝は、父の膝の上に抱かれて写っています。昭和18年臨時召集で父32歳。物資の揚陸が主な任務。現役の警察官までも召集され、三八式歩兵銃を貸与されて出征しました。この銃は明治38年（1905年）に陸軍に採用され菊の紋章と『三八式』という文字が刻印され、40年近くも歩兵の装備に使われていました。小柄な日本兵が携行する銃は、一度に5発弾をこめる旧式で、重さは約4kgで長さ約80cm。一方、大柄の米兵の持つ最新の自動小銃は61cmでした。



現在ロシア軍が保有する軍装備は、ソ連時代の旧式で、ボディにはウクライナ軍の同じ型の戦車と区別できるように“Z”とペイントされています。

さて、ウクライナへの入国ビザも無しに「ネオナチからウクライナの人々を解放する」とでっちあげて侵攻したロシアですが、かつての日本でも「白人の植民地支配からアジアの同胞を解放する」と称して、朝鮮半島と台湾出身の兵士に日本の軍服を着せて、タイに侵攻しました。でもね、当時タイは欧米の植民地ではなく、独立国だったんですよ。

なぜ5千キロも南の島ニューギニアへ？ 開戦後、日本では石油の確保ができなくなったことで、南方の石油資源を求めて、日本軍はニューギニア方面まで戦線を拡大し、父もパラオ経由でラバウル、東部ニューギニアへ転戦、1年後にジャヤプラで戦没しました。

ロシアのウクライナ侵攻で世界中の食料不足、飢餓が心配されています。当時の日本国内でも食料が不足し、配給される食料はわずかでしたが、海外の戦場では補給が断たれ、ニューギニアで命を落とした兵士の大多数がマラリアと餓死でした。日本からの補給物資を陸に揚げ終わったそのタイミングで、毎回、米軍に物資を空爆されたそうです。

日本はこうして世界を敵に回して戦争をしたことで、自国を焦土にし、軍人軍属の戦没者は246万人。アジアの国々で巻き込まれて命を落とした人の総数は不明です。

戦争に勝者はなく存在するのは被害者だけ。日本が始めた戦争の後始末はまだ終わっていません。太平洋戦史館は、77年以上前に亡くなった兵隊さん进行搜索する活動を、今も続けています。百万人以上が故郷に帰れずに斃れたその地に放置されているのですから。